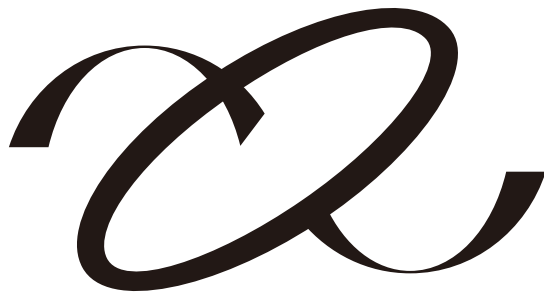


公益社団法人
石川県言語聴覚士会

年 報

2024年度 第7巻



Ishikawa
Speech-Language-Hearing
Therapist Association

目 次

2024年度年報 発刊に寄せて	…… 公益社団法人 石川県言語聴覚士会 会長 徳田 紀子
1. 公益社団法人石川県言語聴覚士会の概要	1
2. 2024年度の主な事業一覧	3
3. 2025年度の主な事業・行事予定	9
4. 2024年度 研修会一覧	10
1) 研修部	
症例検討会	
2) 学術部	
①生涯学習プログラム	
・ 専門講座	
・ 基礎講座	
②第22回 北陸言語聴覚学術集会（石川開催）	
5. 石川県言語聴覚士会 震災支援活動報告	20
6. キャリアアップ支援事業	21
7. 県民向けイベント	23
1) 言語聴覚の日	
2) 県民公開講座	
3) 小児発達相談会	
8. 他団体との連携事業	25
1) 石川県理学療法士会・作業療法士会・言語聴覚士会連絡会研修会	
2) 石川JRAT 報告	
3) 特別支援学校の医療等外部専門家との連携事業	
4) 石川県理学療法士会 地域支援事業への協力	
9. 2024年度失語症者向け意思疎通支援者養成事業報告	32
1) 失語症者向け意思疎通支援者養成講習会	
2) 失語症者向け意思疎通支援者フォローアップ研修	
10. 関連団体主催行事などへの参加活動	34
1) 志賀町リハビリテーション友の会 言語リハビリ講習会への講師派遣	
2) きこえの相談会相談員派遣・きこえの講演会開催報告	
3) 石川県失語症友の会研修会・月例会での協力施設	
4) 金沢市フレイル予防事業	
5) 金沢市健康づくりフェア	
6) いしかわ介護フェスタ	

石川県言語聴覚士会シンボルマーク(表紙)の意味

直接的には、中心の輪の部分が「口」「耳(鼓膜)」「脳」を、サイドの曲線部分が「声・音(音波)」を抽象化したデザインです。

さらに、もうひとつの意味として、中心の輪は「コミュニケーションのバリア」、曲線は「つながり」をイメージしています。

つまり、このマークは、「コミュニケーションの輪を広げ、多様な人生との絆を深めよう」「社会や自分の中のバリアを突き破り、共に生きていこう！」という私たちのメッセージを象徴しているのです。

2024 年度年報 発刊に寄せて



公益社団法人
石川県言語聴覚士会
会長 徳田 紀子

2024年度は、災害リハビリテーション支援活動から復興リハビリテーション支援活動へと移行していく中で、言語聴覚士の専門性を医療・介護・福祉の分野で改めて認知していただける1年となりました。同時に、平時の地域リハビリテーション活動の在り方を考える機会も多くありました。

2024年度は震災支援に関連した活動が不可欠な状況でしたが、関連団体の皆様や地域の皆様からご支援をいただきながら、例年行ってきた当会の事業もほぼ予定通り行うことができました。石川県の委託事業である失語症者向け意思疎通支援事業においては、支援者養成講習会に加えて、すでに講習会を修了した支援者を対象にフォローアップ講習会を行っています。支援者の方々は、失語症友の会の例会や失語症カフェに参加することで、コミュニケーション支援の技術を確実に高めることができていると感じています。11月の県民公開講座は「吃音ってなあに？ほんとうの事を知ろう～当事者の生の声から～」というテーマで当事者参加型の講演会と対談を行い、吃音症の方々の日々の悩みや関わり方など活きた声を知る機会となりました。例年行っている「言語聴覚の日イベント」「いしかわ介護フェスタ」や「金沢市健康づくりフェア」では、聴力検査や嚥下リハビリ体操の体験を通して、地域の方々にコミュニケーション障害や摂食嚥下障害そして言語聴覚士について知っていただく機会となりました。また相談事業として「きこえの相談会」や「小児の発達相談会」を開催し、当事者やご家族の方にたくさん参加していただいております。

石川県言語聴覚士会は正会員が160名程度の小さな会で、残念ながら県内全域に十分な活動が展開できているとは言えません。少しずつではありますが、これまで行ってきた事業を継続しながら復興リハビリテーション支援活動を展開していくことで、平時の地域リハビリテーション体制の中に「コミュニケーション」や「食べる・飲む」ことへの支援が定着することを目指していきたいと思っております。会員の一人一人が自己研鑽を惜しまず、ここぞという時に自信を持って専門性を発揮し、皆様と連携のとれた活動を行ってまいります。今後とも何卒ご指導・ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

2025 年 3 月吉日

1. 公益社団法人石川県言語聴覚士会の概要

2025 年 3 月現在

沿革：2000 年 4 月 9 日 石川県言語聴覚士会設立
2012 年 4 月 22 日 一般社団法人石川県言語聴覚士会へ移行
2018 年 4 月 1 日 公益社団法人石川県言語聴覚士会へ移行

事務局：

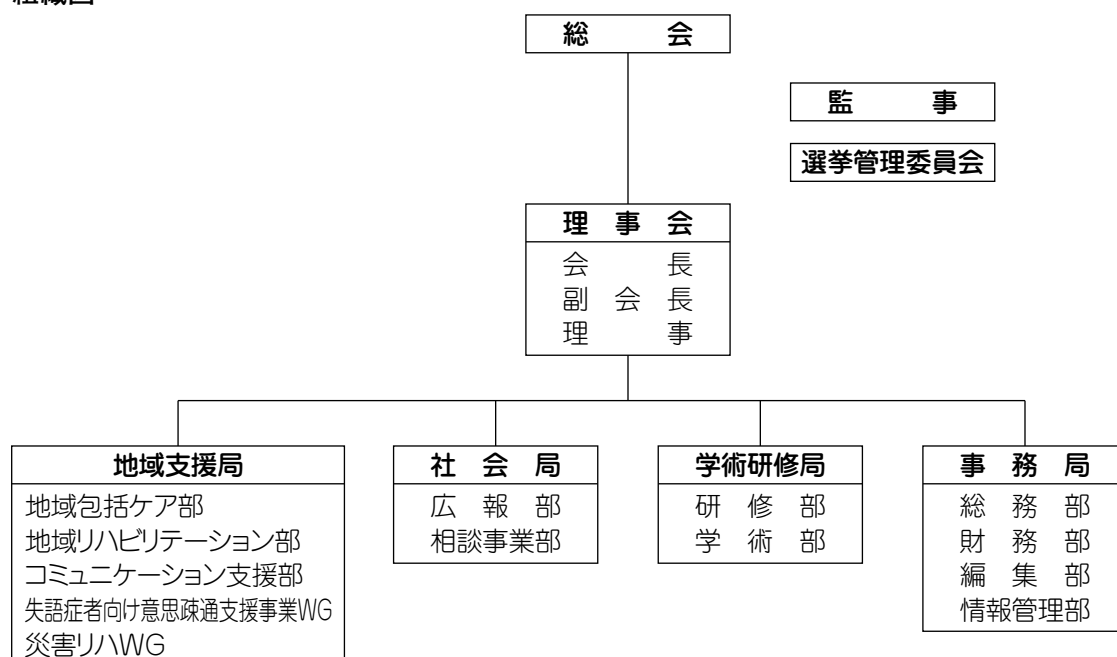
【 名称 】 公益社団法人石川県言語聴覚士会
【 住所 】 〒923-8551
石川県小松市八幡イ 12-7
やわたメディカルセンター 言語療法室内
【 TEL 】 0761-47-1212 (代)
【 E-mail 】 info@st-ishikawa.com
【 URL 】 <https://st-ishikawa.com/>

目 的：当法人は、県民の医療・介護・保健・福祉・教育の増進に寄与することを目的とし、言語聴覚士の技能及び資質の向上並びに言語聴覚療法及びサービスの普及・啓発・発展を図る。

事 業：

1. 県民の医療・介護・保健・福祉・教育の増進及び生活支援に関する事業
2. 言語聴覚療法の普及・発展に関する事業
3. 言語聴覚士の職業倫理及び社会的責務に関する事業
4. 言語聴覚士の知識及び技術の向上に関する事業
5. 関連団体との連携及び協力に関する事業
6. 会員の福利厚生に関する事業
7. 前各号に定める事業に関連する事業

組織図：



役 員：

任期：2023年6月23日～2025年総会

役 職 名		氏 名	所 属 施 設	役 割	
代表理事	会 長	徳田 紀子	二ツ屋病院	会務の総括および渉外	
理 事	副 会 長	上野真由美	金沢西病院	会長補佐 渉外・地域担当	
	副 会 長	藪越 文佳	公立能登総合病院	会長補佐 総務・法人関係業務	
	学術研修局 学術研修局統括 学術部	藤田 徹	金沢こども医療福祉センター	会長補佐、症例検討、協会生涯学習 基礎講座、キャリアアップ支援事業	
		学 術 部	山崎 憲子	金沢医科大学病院	協会生涯学習専門講座、言語聴覚 学術集会、会員研修プログラム
	社会局 社会局統括 相談事業部	田嶋宏太郎	小松市民病院	関連団体との連携（講師派遣）	
		広 報 部	城本 亜衣	金沢春日ケアセンター	言語聴覚の日・いしかわ介護フェスタ その他広報活動
	地域支援局 地域支援局統括 地域リハ部	谷口 昌代	KKR北陸 訪問看護ステーション	地域リハ関係業務 失語症者向け意思疎通支援事業の推進 コミュニケーション障害についての啓蒙	
		災害リハWG	金沢 一恵	かがやきクリニック	災害医療に関する知識と技術を有する STの育成、石川JRATへの参加
	事 務 局	編 集 部	長原 幸穂	城北病院	ニュースレター・年報の編集・発行 理事会書記・議事録作成
		財 務 部	宗石 順子	独立行政法人 国立病院機構 金沢医療センター	収支管理
		情報管理部	大聖寺 友里那	浅ノ川総合病院	会員情報管理・ホームページ管理 職能に関する情報収集・発信
		総 務 部	木村 聖子	恵寿総合病院	窓口業務・各種文書管理・総会準備 法人関係業務・会員の親睦交流など
監 事		杉本奈那子	JCHO金沢病院		
		勝木 準	やわたメディカルセンター		

会員数：合計 191 名

(2025年3月31日現在)

正 会 員		160 名		
賛助会員	個人	3 名		
	団体	21団体	A 会員	やわたメディカルセンター
			B 会員	株式会社アルバ、社会医療法人財団 董仙会 恵寿総合病院
			C 会員	医療法人社団 浅ノ川 金沢脳神経外科病院、医療法人社団 慈豊会、大生食品工業株式会社、株式会社 フードケア、マルト株式会社 印刷事業部、バランス株式会社、ニュートリー株式会社、キッセイ薬品工業株式会社、株式会社 明治中部支社 北陸オフィス、株式会社 大塚製薬工場、ティーアンドケー株式会社、独立行政法人 地域医療機能推進機構 金沢病院、公益社団法人 石川勤労者医療協会 城北病院、医療法人社団 博友会 金沢西病院、石川県済生会 金沢病院、医療法人社団 和楽仁 芳珠記念病院、株式会社 宮源、理研産業株式会社
学生会員		0 名		

2. 2024年度の主な事業一覧

1. 言語聴覚士の質の向上（知識・技術の習得）および社会的責務に関する事業

新人育成のための研修

事業名	担当者	開催日	開催場所	参加者及び内容
新入会員オリエンテーション	藤田	6月2日	金沢市 ものづくり会館	JAS生涯学習プログラム・ISTA会員研修プログラム等の概要や研修を中心とした説明、情報交換等実施。 参加者9名
日本言語聴覚士協会 生涯学習基礎講座	藤田	8月18日	Web研修	参加者5名(会員5名) 講師1名(会員1名) 「生涯学習基礎講座『チーム医療のありかた』」
		8月18日	Web研修	参加者5名(会員5名) 講師1名(会員1名) 「生涯学習基礎講座『言語聴覚士の倫理』」
症例検討会	藤田	4月19日	Web研修	参加者9名 「症例検討会 視床失語症を呈した症例がSFAにより呼称能力が改善した一例」
症例検討会	藤田	12月26日	Web研修	参加者10名 「復職に向けて病識及び障害理解に取り組んだ感覚性失語症の一例」

技術向上のための研修

事業名	担当者	開催日	開催場所	参加者及び内容
第22回北陸言語聴覚学会 集会	山崎	10月6日	金沢医科大学	参加者52名(会員27名、会員外25名) 一般演題9題(会員5題、会員外4題)
地域リハリーダー養成 研修会	谷口 上野	中止		初期研修会はDVD貸し出しに変更。 導入研修会は中止した。
日本言語聴覚士協会 生涯学習専門講座	山崎	7月27日	Web研修	参加者46名(会員30名、会員外16名) 講師1名(会員外1名) 「ST業務に役立つ疾患別脳画像読影と臨床への 応用」
日本言語聴覚士協会 生涯学習ポイント対象研修会	山崎	10月6日	金沢医科大学	参加者52名(会員27名、会員外25名) 講師1名(会員外1名) 「超皮質性失語の言語症状をビデオでみる」
会員研修プログラム ベーシック コース「音声障害」	藤田	8月3日	Web研修	参加者9名(会員9名、会員外0名) 講師1名(会員1名)
会員研修プログラム ベーシック コース「高次脳機能障害」	藤田	11月30日	Web研修	参加者6名(会員6名、会員外0名) 講師1名(会員1名)
吃音相談・研修システム体制の 運営(臨床施設調査、研修会、 相談・紹介システム)	藤田 木村	随時	Web研修	吃音の臨床や支援等に関する研修及び相談・ 紹介に関する情報提供等を実施

関係団体と合同で行う研修

事業名	担当者	開催日	開催場所	参加者及び内容
石川県訪問リハビリテーション実務者研修会	金沢	2月15日	Web研修	参加者1名(会員1名)
地域ST研修会	谷口	中止		参加者申し込みなく中止
石川県理学療法士会、作業療法士会、言語聴覚士会連絡会、県リハビリテーションセンター共催の研修会	上野	7月7日	ハイブリッド (Webと参集) 県リハビリテーションセンター	市町事業に関わるリハビリテーション専門職育成研修① PTOTST共通導入研修 参加者83名(会員10名、会員外72名：PT39名、OT31名、その他：3名) 講演 「平時の知識とスキルを活かした復興期リハビリテーション支援 ～熊本県復興リハビリテーションセンターにおける活動の実際～」
石川県理学療法士会、作業療法士会、言語聴覚士会連絡会主催の研修会	上野	3月1日	ハイブリッド (Webと参集) 県リハビリテーションセンター	市町事業に関わるリハビリテーション専門職育成研修② PTOTST共通導入研修 参加者146名(会員14名、会員外135名：PT53名、OT50名、その他：29名) テーマ 「地域包括ケアとリハビリテーション ～復興リハビリテーションを中心に～」
石川JRAT研修会	金沢	2月22日	ハイブリッド (Webと参集) TKP金沢	参加者26名(会員14名、PT6名、OT4名、他2名) 「能登半島地震の経験を南海トラフ地震に生かすためにはどうすれば良いか」 「DWATの現状と課題」

他団体が開催する研修会への派遣

事業名	担当者	開催日	開催場所	参加者及び内容
失語症者向け意思疎通支援者指導者養成研修	金沢	10月26日 27日	Web研修	会員1名 Web研修 1名修了
JIMTEF災害医療研修会	金沢	7月16日～ 8月16日 9月17日～ 10月17日	Web研修	会員4名 ベーシックコース4名修了

助成

事業名	担当者	開催日	開催場所	参加者及び内容
キャリアアップ支援事業	藤田	通年	Web研修と参集	申請者2名(会員2名、会員外0名) うち助成2名 使用研修会名 ・ PCITイニシャルワークショップ in 東京 ・ 第18回JIMTEF災害医療研修ベーシックコース

2. 県民への言語聴覚療法等の普及・啓発及び支援に関する事業

事業名	担当者	開催日	開催場所	参加者及び内容
「言語聴覚の日」のイベント	城本	8月25日	学びの杜のいちカレード オープンギャラリー	内 容：パネル展示・川柳コンテスト 来場者：36名 参加者：広報部員8名
川柳コンテスト	城本	募集 6月17日～ 7月31日 投票 8月25日～ 9月15日	募集 県士会HP (Web上) 投票 Web上と 言語聴覚の日 イベント会場にて	川柳コンテストをメール等で募集し、Web上と言語聴覚の日のイベント会場とで投票を行った。 9月末にホームページ上で結果を報告した。 募集俳句：応募総数155句 掲載は155句 表彰：金賞1名 銀賞2名 銅賞3名 入選5名
金沢市「健康づくりフェア」へのブース出展	城本	9月28日 ～29日	金沢健康プラザ 大手町東館	「簡易的な聴力検査」と「お口まわりと滑舌相談」 来場者：139名 参加者：会員10名
いしかわ介護フェスタへのブース出展	城本	11月9日	石川県 産業展示館 3号館	内容：体験・パネル展示・相談 来場者：152名 参加者：広報部員4名
「お仕事まるわかり事典」2025年度版への寄稿	城本	1月		(株)日本医療企画によって作成される高校生・中学生に向けた職業紹介情報誌へ言語聴覚士の職業紹介文を寄稿
県民公開講座	谷口	11月23日	県立図書館 2階研修室 ①④	参加者38名(会員7名、会員外31名：保育士2名、教職員4名、社会福祉士1名、保護者9名、医師1名、支援者1、当事者5名、その他8名) 講演：松井 佑介 氏 (一般社団法人 Be. カラフル) 小林 宏明 氏 (金沢大学 人間社会研究域 学校教育系教授) 「吃音ってなあに? ほんとうの事を知ろう ～当事者の生の声から～」
小児発達相談会	上野	7月7日	金沢市教育 プラザ富樫	相談者9名 参加者ST6名(会員6名)
	上野	7月14日		相談者7名 参加者ST6名(会員6名)
失語症者向け意思疎通 支援者養成事業 (石川県委託事業) ①失語症者向け意思疎通 支援者養成講習会	金沢	8月4・18日 9月1・8・21日 10月13・26日 11月9・23日 (計9回開催)	金沢市 ものづくり会館 能美市 防災センター	受講者9名 講師 延べ17名(うちPT1名、県職員1名) スタッフ、チューター 延べ33名 当事者講師 延べ20名 修了者 R5年度開始2名 R6年度開始7名 合計9名 (1) 失語症とは何か (2) 意思疎通支援者の役割、心構え及び倫理 (3) コミュニケーション支援 (4) 外出同行支援 (5) 身体介助 (6) その他、失語症者の意思疎通支援に必要な事項 失語症友の会会員当事者、会員以外の当事者の実習参加、意思疎通支援者の実習参加を行った。

事業名	担当者	開催日	開催場所	参加者及び内容
②失語症カフェ	金沢	8月3日	市立輪島病院	能登地区 参加者数：4名(うち支援者1名) ST2名
		11月2日	プロム小松	加賀地区 参加者数：9名(うち支援者5名) ST5名
		2月9日	石川県立図書館	金沢地区 参加者数：22名(うち支援者5名) ST6名
③失語症者向け意思疎通 支援者フォローアップ研修	金沢	7月14日 2月15日	金沢ものづくり 会館	1回目 参加者数：24名 ST5名 2回目 参加者数：20名 ST5名
会のホームページの刷新 管理運営	木村	通年		ホームページの更新、内容充実を図った。 メンバーリストの管理を行った。

自治体や他団体が開催する各種研修会・イベントへの派遣

石川県立看護大学講義
 石川県失語症友の会例会
 志賀町リハビリテーション友の会 言語リハビリ教室
 金沢市フレイル予防事業、健康づくりフェア出展
 聞こえの相談会（白山市、能登地区、中能登、内灘、小松市）
 特別支援学校の医療等外部専門家との連携事業（珠洲、輪島、七尾、明和、いしかわ、ろう、小松、小松瀬領、錦城）
 加賀脳卒中地域連携協議会
 学校教育連携担当者連絡協議会
 石川県地域リハビリテーション推進検討会議
 石川県在宅医療推進協議会
 金沢市教育プラザ総合保育巡回指導
 石川県理学療法士会 令和6年度 高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施事業（七尾市）
 石川県理学療法士会 令和6年度 宝達志水町ヘルスケアサポーター養成講座

3. 言語聴覚療法の研究・調査に関する事業

事業名	担当者	調査日	参加者及び内容
アンケート調査 VF・VE・訪問リハ	石原	9月10日～ 9月23日	毎年行っている外来VE、VF検査実施施設、訪問リハ実施施設一覧の更新を行った。

4. 言語聴覚療法に関する刊行物の発刊に関する事業

事業名	担当者	発行日	内 容
石川県言語聴覚士会年報 の発行	長原	6月2日	今年度の事業を年報としてまとめ、内容の充実化と読みやすい紙面づくりを図った。
ニュースレターの発行 (年4回)	長原	6月、9月 12月、3月	年4回ニュースレターを作成し、発行した。

5. 関係団体との連携及び協力に関する事業

事業名	担当者	開催日	開催場所	参加者及び内容
石川県訪問リハビリテーション連絡会	金沢	12月18日	Web会議	訪問リハ・地域リーダー会議報告、訪問リハ実務者研修会の研修の日程や内容について協議した。
		2月13日		
石川県理学療法士会 作業療法士会 言語聴覚士会連絡会	徳田 上野	7月29日	県リハセンター	県リハビリテーションセンターの協力を得て、地域ケア会議・介護予防事業に関する研修会の企画運営を行った。
		12月19日		
		3月18日		
災害リハビリテーション支援 担当者連絡会	徳田	5月28日	県リハセンター	石川JRAT役員と県の厚生政策課、長寿社会課、障害保健福祉課、医療対策課、県リハ事務局、能登地区担当で、能登半島地震での復興リハビリ支援活動について情報共有を行った。。
		3月1日		
復興リハビリテーション支援 活動に関する会議	徳田	9月5日	県リハセンター	石川県理学療法士会・作業療法士会・言語聴覚士会の会長と県リハセンター復興リハ担当で、復興リハビリ及び士会の地域リハビリ支援活動の進捗状況について情報共有を行い、今後の支援体制について協議した。
		10月11日	Web会議	
		11月21日		
		12月19日		
		1月28日		
石川JRAT会議	金沢	4月30日	Web会議	幹事会が開催され、JRAT活動の振り返り、今後の組織体制、石川JRAT研修会の準備、リーフレットの作成などを中心に協議した。
		6月8日		
		8月19日		
		9月22日		
		2月14日		
		3月25日		
士会協会間の連携体制 構築推進会議	徳田	4月23日	Web会議	士会協会間の会員の一致化に向けた連携体制構築のための会議に、委員として出席した。
		5月30日		
		7月2日		
		9月3日		
		10月7日		
		11月22日		
		12月17日		
		1月22日		
		3月4日		
士会協会間の連携体制 構築担当者会議	徳田	6月18日	Web会議	士会協会間の会員の一致化に向けた連携体制構築のための会議に、士会担当者として出席した。 (3/24は都合により欠席)
		10月30日		
		3月24日		

6. 福利厚生事業

事業名	担当者	開催日	開催場所	参加者及び内容
会員懇親会・交流会	木村	中止		能登半島地震に伴い中止
企業展示	中村	6月2日	定時総会	2社(株式会社フードケア、株式会社宮源)の商品プレゼンテーションを実施した。
		11月6日	北陸言語聴覚 学術集会	・抄録集巻末の広告掲載6社(ティーアンドケー株式会社、ニュートリー株式会社、バランス株式会社、株式会社フードケア、株式会社宮源、株式会社明治) ・企業展示出展6社(バランス株式会社、株式会社明治、ティーアンドケー株式会社、キッセイ薬品工業株式会社、理研産業株式会社、株式会社フードケア)
会員向け災害時安否確認 の登録・模擬訓練	金沢	通年	金沢	2025年3月31日現在132名登録済

7. 組織の運営・管理

事業名	担当者	開催日	開催場所	参加者及び内容
定時社員総会	木村	6月2日	ハイブリッド (Webと参集) 金沢市ものづくり 会館	公益社団法人第7回定時社員総会として162名の 総社員中出席社員(書面評決による者を含む)は 106名(委任状69名) 第1～2号議案すべて承認
理事会	徳田	4月29日	Webと参集	
		7月14日		
		9月14日		
		11月10日		
		1月19日		
		2月24日		
		3月9日		
局・WGミーティング	各理事	適宜		

3. 2025年度の主な事業・行事予定

月日（曜）	事業・行事
5月25日（日）	総会
6月	年報発行
6月	ニュースレター発行
7月20日（日）	小児発達相談会
8月末	言語聴覚の日イベント
9月	ニュースレター発行
開催日未定	金沢市健康づくりフェア出展
開催日未定	いしかわ介護フェスタ出展
12月	ニュースレター発行
3月	ニュースレター発行

*キャリアアップ支援事業（通年）

*会員向け災害時安否確認の登録（通年）

《地域支援局より》

- 日程未定
地域リハビリダー養成研修会
訪問リハビリテーション実務者研修会
県民公開講座

《研修部より》

- 日程未定
症例検討会
吃音研修会
生涯学習基礎講座「言語聴覚士のキャリア形成」
「職能団体の役割と言語聴覚士の責務」
ベーシックコース「失語症」「機能性構音障害」
「同職種連携」

《学術部より》

- 日程未定
第23回北陸言語聴覚学術集会（富山）
第13回石川県言語聴覚学術集会
日本言語聴覚士協会生涯学習専門講座・
生涯学習ポイント対象研修会

《災害リハWGより》

- 日程未定
石川JRAT研修会

【理事会開催予定】

4月27日、5月25日、7月13日、9月21日、11月16日、
1月18日、2月15日、3月8日

2025年度学会スケジュール

- 第51回日本コミュニケーション障害学会
5/17(土)・18(日)熊本
- 第26回日本認知症ケア学会
5/31(土)・6/1(日)福岡
- 第67回日本小児神経学会
6/4(水)～7(土)鳥取
- 第26回日本訪問リハビリテーション協会学術大会
6/7(土)・8(日)群馬
- 第62回日本リハビリテーション医学会
6/12(木)～14(土)京都
- 第67回日本老年医学会
6/27(金)～29(日)幕張
- 第26回日本言語聴覚学会
6/27(金)・28(土)山形・ハイブリッド
- 第49回日本神経心理学会
9/18(木)・19(金)姫路
- 第31回日本摂食嚥下リハビリテーション学会
9/19(金)・20(土)横浜
- 第70回日本聴覚医学会
10/15(水)～17(金)成田
- 日本LD学会第34回大会
10/18(土)・19(日)東京
- 第70回日本音声言語医学会
10/23(木)・24(金)神戸
- 第84回日本脳神経外科学会
10/29(水)～11/1(土)横浜
- 第49回日本高次脳機能障害学会
11/14(金)・15(土)愛知
- リハビリテーション・ケア合同研究大会
11/21(金)・22(土)大阪
- 第44回日本認知症学会
11/21(金)～23(日)新潟
- 第36回全国介護老人保健施設大会
11/27(木)・28(金)山口
- 第41回日本臨床栄養代謝学会
2026/2/13(金)・14(土)横浜
- 第15回日本リハビリテーション栄養学会
2026/3/14(土)金沢

*学会スケジュールにおいては各学会の公式HPをご確認ください。

4. 石川県言語聴覚士会主催 2024 年度 研修会一覧

※Web開催にはZoomを使用

年月日(曜)	内 容	講師・発表者	場 所	担当
2024. 4.19 (金)	症例検討会 「左視床出血による失語症を呈した症例 SFAにより改善した一例」	金沢脳神経外科病院 青木 大晟 会員	Web開催	研修部
2024. 7.27 (土)	生涯学習プログラム専門講座 「ST業務に役立つ 疾患別脳画像読影と臨床への応用」	小宮 桂治 先生	Web開催	学術部
2024. 8.3 (土)	会員研修プログラムベーシックコース 「音声障害」	金沢医療センター 千羽 真央 会員	Web開催	研修部
2024. 8.18 (日)	生涯学習プログラム基礎講座 「チーム医療のあり方」	恵寿総合病院 諏訪 美幸 会員	Web開催	研修部
2024. 8.18 (日)	生涯学習プログラム基礎講座 「言語聴覚士の倫理」	金沢こども医療福祉センター 藤田 徹 会員	Web開催	研修部
2024. 9.7 (土)	会員研修プログラムベーシックコース 「医療・介護・社会福祉」	久藤総合病院 小森 賢治 会員	Web開催	研修部
2024. 10.6 (日)	第22回北陸言語聴覚学術集会 一般演題 1-2.「理解面向上・発話機会の確保により 改善した症例」 1-3.「音声障害の自覚的評価尺度VHIを 用いた治療効果の評価」 2-1.「SNAQを用いてリハビリ介入し自宅 退院に至った右顔面重症壊死性筋膜 炎により嚥下障害を呈した高齢症例」 3-1.「能登半島地震における被災病院のSTと しての対応-院内での活動を中心に-」 3-3.「令和6年能登半島地震における 1.5次避難所での言語聴覚士としての 取り組み」 特別講演 「症例ビデオから学ぶ失語」	金沢脳神経外科病院 青木 大晟 会員 国立病院機構 金沢医療センター 千羽 真央 会員 金沢医科大学病院 柴田 真彩 会員 恵寿総合病院 藪下 千穂 会員 石川県言語聴覚士会 災害リハWG 金沢 一恵 会員 菰野聖十字の家 波多野和夫 先生	金沢医科大学病院	学術部

年月日(曜)	内 容	講師・発表者	場 所	担当
2024. 11.23 (土)	県民公開講座 「吃音ってなあに？ ほんとうの事を知ろう ～当事者の生の声から～」	一般社団法人 Be.カラフル 松井 佑介 氏 金沢大学 人間社会研究域 学校教育系教授 小林 宏明 氏	石川県立図書館	地 域 支援局
2024. 11.30 (土)	会員研修プログラムベーシックコース 「高次脳機能障害」	済生会金沢病院 山本 史佳 会員	Web開催	学術部
2024. 12.26 (木)	症例検討会 「復職に向けて病識及び障害理解に 取り組んだ感覚性失語症の一例」	やわたメディカルセンター 中村レイコ 会員	やわたメディカルセンター	研修部
2025. 2.2 (日)	会員研修プログラムベーシックコース 「同職種連携 STの 急性期・回復期・生活期の連携を考える」 1.「急性期でのSTの役割」 2.「回復期でのSTの役割」 3.「生活期でのSTの役割」	県立中央病院 河本ちひろ 会員 金沢脳神経外科病院 高田 亮 会員 城北病院 中村 洋子 会員	Web開催	研修部
2025. 2.23 (日/祝)	会員研修プログラムベーシックコース 「言語発達障害」	金沢こども医療福祉センター 藤田 徹 会員	Web開催	研修部

1) 研修部

症例検討会

■視床失語症を呈した症例がSFAにより 呼称能力が改善した一例

金沢脳神経外科病院

青木 大晟



【はじめに】左視床出血により失語症を呈し、SFAの実施したことで呼称能力が改善した症例を報告する。

【対象】患者：70代・男性、医学的診断名：左視床出血、神経学的所見：右片麻痺（BRS：Ⅱ－Ⅱ－Ⅲ）、神経心理学的所見：失語症、嚥下障害、構音障害、画像所見：頭部CT、MRIにて左視床出血。脳室穿破、既往歴：高血圧、現病歴：X年Y月Z日、浴室で唸り声が聞こえて倒れているところを発見。右半身麻痺と呂律障害で当院に救急搬送。Z+1日3部門開始、Z+11日回復期病棟転棟、利き手：右、入院前生活：妻、長男、長女の4人暮らし（キーパーソン妻）ADL、IADL：自立、学歴：高卒（12年）、職歴：卸売業、主訴：単語がでてこない。呂律が回るようになりたい。

【訓練経過と検査結果】TLPA（Z+28日）名詞表出：37/40（高頻度語：18/20、低頻度語：19/20）動詞表出：34/40（高頻度語：16/40、低頻度語：18/20）意味カテゴリー別名詞：137/180（高頻度語：74/90、低頻度語：67/90、意味性錯語：19、音韻性錯語：2、喚語困難：9、迂言：11、ジャルゴン：2）TLPA（Z+106～107日）名詞表出：38/40（高頻度語：20/20、低頻度語：18/20）動詞表出：40/40意味カテゴリー別名詞：165/180（高頻度語：87/90、低頻度語：78/90、意味性錯語：11、迂言：1、喚語困難：3）前期（Z+29～48日）SFAでは用紙だけでは意味情報や連想が想起されないため、thの誘導や助言が必要。呼称と再呼称の正答率に変化は少ない。書字課題では、想起に時間を要する。鏡映文字や音韻性錯書、長音の脱落あり。

会話としては、喚語困難や意味性錯語あり、本人からも喚語困難感があった。中期（Z+49～70日）SFAではthの助言や誘導を減少ジェスチャーで回答することあり。呼称の正答率8/10。再呼称で全て正答になる頻度増加。書字課題は15語へ変更したが、想起時間は短縮。鏡映文字はないが、音韻性錯書や長音の脱落あり。会話として喚語困難は残存しているが、意味性錯語は減少。迂言の頻度がやや増加。後期（Z+70～104日）SFAは用紙のみで実施し、自発的に表出可能。意味情報の想起可能。連想の想起にやや困難感あり。呼称、再呼称ともにすべて正答可能なことが多い。書字課題では錯書なども見られず。会話は迂言や喚語困難あるが、前期より減少。

【考察】Crosson（2013）は左視床と言語機能の関連について、左視床は言語野を含む皮質と連絡を取りながら必要な語彙や関連するイメージあるいは意味野を選択的に際立たせ、不必要な語彙を非活性化させているという。よって、視床失語であることから意味障害に関するアプローチが必要だった。本症例はTLPAの結果から、錯語や喚語困難の頻度が減少したこと、会話時における喚語困難感の軽減したことから、訓練語・非訓練語ともに改善したと考える。これは先行研究の結果と一致しており、回復期におけるSFAの訓練は有効であることが示唆された。本症例のSFAの訓練経過として、意味属性の想起が開始時に比し想起までの時間の短縮、呼称の正答率上昇が確認された。このことから、本症例は喚語方略として習得し、自己産生的な手がかりとしてを使うことで、非訓練語へ呼称成績が般化したと考えられる。

【参考文献・引用文献】

- ・中島明日佳、船山道隆、中村智之、稲葉貴恵 視床失語とは何か―無関連錯語から背景に迫る― 高次脳機能研究 第40巻第3号, 2020
- ・石井由起、春原則子 日本語慢性期流暢性失語症2例へのSemantic Feature Analysis (SFA) による呼称訓練の効果 高次脳機能研究 第38巻第4号, 2018
- ・石井由起、春原則子 急性期失語症の呼称訓

練：意味素性や音韻部門の情報を活用した訓練による新しい試み 東北文化学園大学リハビリテーション学科紀要 第18巻第1号, 2023

■復職に向けて病態及び障害理解に取り組んだ感覚性失語症の一例

やわたメディカルセンター
中村レイコ



【はじめに】心原性脳塞栓症により感覚性失語症を呈した患者に対し、病態と障害理解の促しを含めた言語聴覚療法を行ったことで、機能改善に加えて復職への準備に至ったので報告する。

【症例】長年喫茶店を経営し、夫と2人暮らしの70歳代女性。発症後21日に当院転院し、同日より言語聴覚療法を開始した。本人、家族の主訴は喫茶店を再開したい。

【初期評価】入院時FIMは、運動項目：91点、認知項目：25点の計116点。SLTA 聴く：47%、話す：35%、読む：80%、書く：14%、計算：20%。TMT A：64秒、B：中断。CBA：20/30点。病棟コミュニケーション状況について、理解は音声のみでは反射的なYES/NO反応があった。表出は音韻性錯語やジャルゴンにより、発話内容は空疎だが誤りの自覚が乏しく一方的話すなど不自然さを認めた。

【経過と結果】機能練習は、音韻認識改善を目的に音韻抽出・配列練習を中心に行った。同時に、失語症の病態について共有しながら会話練習を行っていった。介入開始時は、失語症の自覚がなく会話中に相手に内容が伝わらないのは、聞く相手の理解力が乏しいと捉えており、腹を立てることもあった。機能練習を重ねることで錯語に気付けるようになり、「私何言っとるんやろ」と自身の発話を振り返る発言がみられた。また、言い間違えた際の対処法を尋ねると、「ごめん、失語症なんやって言う」と自身の状態を表現する発言があった。失語症である自覚が身に付き、今後について現実的に考えられるように変化していった。さらに、開始1カ月頃

より喫茶店での接客を見据えて、実際的な評価や練習を行うことで、自分の能力を把握し、課題点への対策を講じるなど意欲的に取り組むことができた。療法開始63日後のSLTAは聴く：60%、話す：65%、読む：80%、書く：36%、計算：25%。TMT A：79秒、B：中断。CBA：27/30点。

【考察】立石（2012）は、「集中的訓練時期には、機能練習のみでなく言語機能や訓練状況について説明するなど、患者および家族の状況に応じて客観的理解を促す必要がある」と述べている。言語障害は、他の障害に比べて本人にも認識されにくいものであるため、機能的療法に加えて、自身の状況に関する客観的理解を促すことが必要だと言われている。本症例では音韻レベルの介入を行ったことで、音韻認識の改善が自己フィードバックを可能にし、障害への気づきを促すことができ、言語機能と会話能力が改善したと考えられた。また、それを接客活動へ展開したことで、復職への意欲も維持できたと考えられた。

【参考文献】

- ・立石雅子 最新のアプローチ 失語症とリハビリテーション 総合リハ・40巻7号, 2012
- ・渡邊 修、宮野佐年、大橋正洋、久保義郎 失語症者の復職について リハビリテーション医学 VOL.37 NO.8 2000

2) 学術部

① 生涯学習プログラム

■専門講座「ST業務に役立つ疾患別脳画像読影と臨床への応用」開催報告

開催日時：2024年7月27日(土) 13:30～15:30

開催方法：Web (Zoom) 開催

講 師：小宮 桂治 氏

今回、専門講座「ST業務に役立つ疾患別脳画像読影と臨床への応用」を受講致しました。

疾患別に脳画像読影の演習を交えながら説明していただき、実際に考えながら学ぶことができました。特に、急性期病態と画像の経時的変化については、普段の臨床で急性期の患者様に関わる ことがあるため、大変参考になりました。今後、主治医による脳画像読影のカルテ記載の理解を深めるだけでなく、脳画像から症状を予測するトレーニングを積んでいかなければならないと思いました。

今回の講義で教えていただいたことを日々の臨床で活かしていけるよう、努力していきたいと思います。

金沢脳神経外科病院 新井 佳央里 ニュースレター2024.9

■基礎講座「チーム医療のあり方」開催報告

開 催 日：2024年8月18日(日)

開催方法：Web (Zoom) 開催

講 師：諏訪 美幸 会員 (恵寿総合病院)

この講座では、高齢化社会における医療や技術の高度化・専門分化に伴い、専門職が連携してチーム医療を提供する必要性を学びました。チームは病期 (急性期・回復期・生活期) によって形態が異なり、多職種での話し合いはその場で問題解決が可能なこと、一方で直接話し合えない時はSTとして情報提供するだけでも意味があることがわかりました。最近特に重要なタスク・シフト/タスク・シェアやJRATや災害リハビリテーションでの言語聴覚士の役割についても理解が深まりました。

私は地域包括ケア病棟で勤務しており、患者さんとそのご家族の退院支援に関わることが多いです。今回学んだ、医療保険・介護保険と病期による施設の機能分担は、切れ目ないサービス提供に欠かせないため、「施設間連携」という形のチーム医療のあり方を常に意識していきたいです。そして、チームでパフォーマンスを発揮するには「心理的安全性が担保されている必要がある」ため、互いの専門性を尊重し、日頃から良好な人間関係を構築する大切さを改めて認識しました。今後、今まで以上に職場での良好な雰囲気づくりを大切に、チームの一員として言語聴覚士の役割を考えながら日々行動していきたいです。

芳珠記念病院 鈴木 菜月 ニュースレター2024.12

■基礎講座「言語聴覚士の倫理」開催報告

開 催 日：2024年8月18日(日)

開催方法：Web (Zoom) 開催

講 師：藤田 徹 会員 (金沢こども医療福祉センター)

私は臨床の現場で患者様の食事面へのアプローチをさせていただくことが多いのですが、患者様の機能面の情報ばかりを重視してしまい、患者様の様子やふとした時の言動から、患者様の思いや主体性を十分に尊重できていなかったと感じることがありました。このようなことを減らすためには、患者様という一人の人に興味を持ち、可能な限りその背景を理解しようと努めることが、患者様に寄り添う、患者様の立場に立つということ、延いてはQOLの向上に繋がるのではないかと思います。また、言語聴覚士法や関連法規を通して、言語聴覚士としてだけでなく、医療従事者としての在り方について考えることができました。さらに、言語聴覚士として患者様と関わらせていただくことへの理解が深まったことで、これまでの私自身の発言や行動、態度をより客観的に見直すことができました。その他に、医療保険と介護保険について基礎的な内容を分かりやすく説明していただき、その仕組みを理解することができました。前述したこと以外にも私の今後の課題が数多く見つかり、自身の経験、知識の足りなさを痛感しました。今後はより一層研鑽に励みたいと思います。このような貴重な機会を設けていただき、有難うございました。

久藤総合病院 高橋 篤司 ニュースレター2024.12

② 第22回 北陸言語聴覚学術集会 (石川開催)

■特別講演 テーマ「超皮質性失語の言語症状をビデオでみる」

講 師：波多野 和夫 先生 (菰野聖十字の家)

金沢でお話しするのはこれが3回目です。今回の話は第1回目の続きです。2回目は、コロナでパソコン講演でしたので、症例ビデオは出せませんでした。今回は症例のビデオを提示してその具体的な言語症状を考えてみたいと思います。そういうわけで、ご来場の先生方はすべて職業上の守秘義務をお持ちの専門医療職であるという前提でお話しさせていただきます。第1回目の症例講義はもう5年も前のこと(2019年)ですが、失語症の中核的存在である、ヴェルニッケ失語、ブローカ失語、全失語をテーマにした話だったと記憶しています。今回は、超皮質性失語の言語症状をめぐるいくつかの症状学的な話題を提供したいと思います。超皮質性失語は、復唱が保存された失語ではありますが、このことはつまり音韻論的障害がなくて、意味論的な障害が前景を占める失語だということを意味します。その点で、言語現象としても、中核的な失語群(ヴェルニッケ失語など)とは対照的であります。特に、小生がこれまで特に取り上げてきた「自動言語」についても、いくつかの注目点があります。それは例えば、「反響言語」のいくつかの形式であり、あるいは頻発する「空語句」の存在であり、さらには「意味性ジャルゴン」の様相であり、関連する精神症状との境界領域の存在などであります。超皮質性感覚失語には認知症と重なる「語義失語」があり、超皮質性運動失語には前頭葉性の発動性障害と隣接する「力動失語」があります。こういう失語亜型の概念内容は、教科書にはたくさん書かれているのですが、読めば読むほど肝心なことがさっぱり分からないといえませんか。症例を実際に経験してようやく納得できるというものではないでしょうか。本を読むことは重要なことでは、但し「百聞は一見にしかず」というように、症例を診るということの重要性は今さら指摘するまでもないでしょう。そんなことをお話してきたらいいと思っています。

北陸言語聴覚学術集会 抄録

■理解面向上・発話機会の確保により改善した症例

○青木 大晟

金沢脳神経外科病院

リハビリテーション部

言語療法課



【目的】失語症などの言語症状により、表出困難が増える。STが失語症者に発話機会を確保し寄り添うことで失語症の回復に繋がると考える。今回、発話意欲向上により改善した症例を経験したため、報告する。

【症例】70代、男性。右手利き。医学的診断名：脳梗塞（左島～前頭葉）。神経心理学的所見：失語症、嚥下障害。既往歴：喘息、脳梗塞。入院前生活：妻、長女の3人暮らし。ADL、IADL：自立。学歴：高校卒。

【経過】回復期転棟時評価 Z+23日 表出面；発語失行によるジャルゴンや喚語困難による意思疎通は困難。書字も促すが実施困難。理解面；聴理解は1段階従命可能。読解は音読動作あるが、行動されず。状況理解も併せての指示には理解可能。1期 Z+23～33日 表出面；自発話少ない。有意味語あるがジャルゴンや錯語が多く、理解困難。コミュニケーションボード使用。理解面；状況理解を併せての理解は可能。第2期 Z+34～65日 表出面；ネガティブな発言は増加したがジャルゴン多く、会話は困難だった。コミュニケーションボード使用するが一部表出される。理解面；話を聞いていないことや分かったふりする場面あり。3期 Z+66～103日 表出面；有意味語増加により意思疎通可能なこと増加した。病棟での不満を話すようになる。理解面；ST以外でも簡単な会話が可能。文レベルではやや理解曖昧さあり。安静度拡大に伴い、会話目的で訪問にくる。4期（退院時）Z+104～173日 発話面；有意味語増加。質問に対する返答では、相手が発話内容を概ね推測可能。自発話ではジャルゴンや喚語困難により推測困

難さは残存した。退院に対する不安を話される。質問に対する発言は相手が発話内容を概ね推測可能。理解面；短文レベルで良好。病院内の職員とも会話可能となるが増加した。

【考察及び結語】言語理解、発話、書字の順に困難となっていき、言語理解がなされた上で発話や書字という言語表出が行われうる。こうした順序性は言語能力の回復に関する研究でも指摘されてきた。本症例においても理解面の向上に発話面への回復に繋がっているため、一致すると推測する。リハビリの課題においても正答率の上昇や正のフィードバックによりリハビリの意欲が高くなり回復に繋がった。また、STの所へ会話目的で訪問にくることで発話機会の確保し、STが聞き役にまわり、患者さんのあらゆる発信行動を受容することで、患者さんの表現しようとする意欲を高めることができたと推測する。

■音声障害の自覚的評価尺度VHIを用いた治療効果の評価

○千羽 真央¹⁾、酒野 千枝¹⁾

清水 聡子¹⁾、宗石 順子¹⁾

青木 蓉子²⁾、脇坂 尚宏²⁾

¹⁾国立病院機構金沢医療センター

リハビリテーションセンター科

²⁾同病院 耳鼻咽喉科



【はじめに】音声の自覚的な評価方法の一つとして Voice Handicap Index (VHI) がある。音声障害に対するアンケート方式の評価法で、心理社会的に患者が自分の音声障害をどのようにとらえているか、機能的、身体的および感情的側面から評価するもので、総点120点満で評価し総合スコアが高いほど、音声障害の影響が大きいことを示す。先行研究で田口らはVHIと治療効果との関連性について音声障害患者の治療前後のVHIを検討し、治療効果の評価にVHIが有用であったと報告した。

【目的】音声治療を実施した音声障害者を対象

に治療前後のVHIの変化を検証し、先行研究と同様の結果が得られるのかを確認し、今後の音声治療に役立てる。

【方法】対象は2020年4月から2024年7月までに当院耳鼻咽喉科外来を受診した音声障害例のうち、VHIによる評価が行えた42例を対象とした。性別は男性20例、女性22例で、年齢は17～87歳で中央値67.0歳であった。疾患は①声帯に器質的病変を認めるもの、②声帯運動障害があるものの、③機能性発声障害の3つに分類し、治療前後にVHIを実施し、治療前後でのスコアの変化をMann-WhitneyのU検定を用い、p値が0.05未満を有意差ありと判定した。

【結果】治療前後で比較できた症例のVHIスコアの平均は、男性は41.3から15.2に、女性が41.4から15.2にいずれも有意に減少した。機能的、身体的、感情的側面ごとのスコアも治療前後には男女ともに有意に減少した。疾患別に見ると声帯に器質的病変を認めるものと機能性発声障害は治療前後のVHIスコアの平均はそれぞれ有意に減少した。疾患別に見ると、治療前後ともに機能性音声障害例ではVHIスコア平均が最も高く、各側面別に見ると、感情的側面のスコア平均が特に高い傾向を示した。

【考察】音声障害患者の治療前後では、有意にVHIスコアが減少し田口らの検討と同様の結果が得られ、VHIは音声障害症例の治療効果の評価に有用であることが示唆された。疾患別では、機能性発声障害のスコアが高く、感情的側面が特に高い傾向を示した。機能性発声障害は心理面の関与が大きいことから比較的高いスコアを示したと考えられる。VHIを用いることで患者の機能的、身体的、感情的の3つの側面において患者がどこに支障を感じているのかを把握し、適切な治療法の選択をすることができる。今回は治療前後でのVHIスコアを比較したが、今後は患者の自覚的評価をVHIを用いて定期的に確認することで、音声治療のアプローチ方法を見直すなど臨床的に活用していきたい。

■SNAQを用いてリハビリ介入し自宅退院に至った右顔面重症壊死性筋膜炎により嚥下障害を呈した高齢症例

○柴田 真彩¹⁾、山本 雅代¹⁾
経田 香織¹⁾、山崎 憲子¹⁾
松井加名子¹⁾、藪下 将人¹⁾
松下 功²⁾



¹⁾金沢医科大学病院

リハビリテーションセンター

²⁾同病院 リハビリテーション医学科

【はじめに】右顔面壊死性筋膜炎による嚥下障害に対し食欲指標 Simplified Nutritional Appetite Questionnaire（以下SNAQ）を用いリハビリを進めた症例を経験したため考察を加え報告する。

【症例】80歳代女性。医学的診断名：右顔面壊死性筋膜炎及びDIC。現病歴：X日に自宅で転倒し右頬をストーブに強打。右頬部腫脹増悪・発熱しX+1日A病院入院。その後も腫脹拡大しX+3日後に皮膚切開目的で当院緊急入院。2日間挿管・17日間の欠食期間を経てX+56日に自宅退院。

【経過】介入当初は嚥き反応のみで倦怠感顕著であった。FIM47（認知34）、声量低下と開口不良で明瞭度4.0、自然度3、発声発語器官運動ほぼ不動、開口1横指程度であった。口腔ケアや間接訓練等、嚥下評価を行い17病日に経口摂取開始した。「主食：ミキサー粥、副食：嚥下Ⅲ（軟固形状、コード3）、水分：薄トロミ（1%）」まで食上げし、経口摂取開始を喜びSNAQ15であった。しかし嗜好合わず摂取量低下し、リハビリ消極的になり、食形態に関し自宅退院可能か不安も聞かれSNAQ9と低栄養状態に至った。リハ内容検討し、栄養士と情報共有。再度嚥下評価を行い「主食：軟飯、副食：軟菜、水分：トロミ不要+補助食品アバンド」へ食上げとなり、摂取量増加。食形態の不安も解消されSNAQ16まで改善しX+56日に自宅退院となった。

【考察】本症例は腫脹による開口障害・嚥下圧不足、嚥下関連筋の筋力低下、咽頭感覚低下に

伴う嚥下反射惹起遅延により嚥下障害を呈したと考える。食形態変更毎に評価した食欲指標SNAQは、嚥下機能改善・食上げ・不安解消に伴い点数が増加し、退院時には低栄養状態も脱した。嚥下障害の改善に合わせ食形態を変更する事は食事摂取量や精神状態の改善に繋がる可能性を示している。また低栄養時のリハビリは機能改善より活動の低下や更なる機能低下を引き起こす可能性も考えられ、栄養状態を図る指標を用いて予後予測しながらリハビリ実施することも重要であると思われた。腫脹・疼痛・倦怠感の改善が嚥下機能改善に寄与したと考えるのが妥当と思われるが、早期リハビリ開始、多職種連携、適宜評価を行い早期に経口摂取開始できたことも嚥下機能改善に繋がったと考える。X+56日と比較的早期に自宅退院でき、SNAQを用い効果的な介入が行えた結果と思われる。

■能登半島地震における被災病院のSTとしての対応 ―院内での活動を中心に―

○藪下 千穂¹⁾、豊田はるか¹⁾

荒尾 祐希¹⁾、木村 聖子¹⁾

諏訪 美幸¹⁾、川北慎一郎²⁾

¹⁾ 恵寿総合病院

リハビリテーションセンター言語療法課

²⁾ 同病院 リハビリテーション科



【はじめに】令和6年元旦に発生した能登半島地震で当院（病床数426床、ST5名在籍）も被災し甚大な被害を受けた。今回、被災病院のSTとしての対応を、院内での活動を中心に報告する。

【経過と活動】1月1日能登半島で最大震度7の地震が発生し、当院がある七尾市は震度6強を観測した。地震により、耐震構造の3病棟と5病棟（回りハ病棟、ST室を含む）は大きな被害を受けたが、免震構造の本館内は被害を免れ、井水の使用が可能だった。当日の夜、職員が3

病棟・5病棟の患者を本館に移送した。STは発災翌日、患者移送や荷物運び、掃除、片付け、看護・介護業務の補助が主であった。発災3日目以降は入院患者の口腔ケア、嚥下訓練を中心に行った。当院は家族に口腔ケア備品を準備していただいているが、家族も被災し来院できず、使用できる備品が限られていた。食事形態・補助食品については栄養士と相談や確認を行った。病院職員も被災し、病棟の職員不足のため、リハ職に急遽、早番遅番勤務の要請があり、毎食の食事介助を行った。嚥下障害患者の食事介助に不安がある他職種に対して、STから介助方法の助言、ST処方への無い患者の嚥下の相談対応も行った。11日目に5病棟が仮復旧し、STも通常業務に戻りつつあったが、処方された患者は避難所等からの体調不良者や誤嚥性肺炎患者が多くを占めていた。

【平時通り運用できたこと】発災直後は口腔ケア備品が限られていたが、備蓄の飲料水等で口腔ケアや嚥下評価を行えた。また、平時から食事介助の注意点をSTが作成し、病棟スタッフと共有していたため、患者移送後も安全に食事介助を行うことができた。

【平時通り運用できなかったこと】発災から約2週間はリハビリ室が使用できず、絵カードや冊子等の訓練道具もスプリンクラーの作動により水没したため、十分なりハビリが提供できなかった。入院患者の食事は数か月にわたり支援物資を提供しており、嚥下障害への細かい対応が難しかった。

【おわりに】平時からの病院の備えにより、STは発災後も口腔内の清潔維持や機能低下の予防に努めることができた。また、急な病棟移動後でも安全な食事介助を行える体制が整っていたことが、誤嚥性肺炎等の二次障害の予防に繋がったと考えた。訓練道具は、ラミネート化を行う等の工夫で水没や破損を防げると考え、現在取り組んでいる。今回は、院内の活動に限られたが今後は地域の支援にも協働できるよう備えたい。

■令和6年能登半島地震における1.5次避難所での言語聴覚士としての取り組み

○筆頭演者氏名：金沢 一恵

共同演者氏名：徳田 紀子

朴木紗希子

石川県言語聴覚士会

災害リハWG



【はじめに、目的】 令和6年1月1日に発生した能登半島地震では、能登地区を中心とした広域の大規模災害となった。石川県言語聴覚士会は、大規模災害リハビリテーション支援関連団体協議会（Japan Disaster Rehabilitation Assistance Team：JRAT）の隊員として活動し、1月8日より開設された1.5次避難所での支援活動での取り組みについて報告する。

【方法】 令和6年1月8日からいしかわ総合スポーツセンターに1.5次避難所が開設され、4月12日の活動停止までJRAT隊員として活動した。言語聴覚士はチーム内で個別評価を行っていたが、その後、1月13日より一時（いっとき）待機所が開設され、能登地区の高齢者施設などからの要介護者の受け入れが多くなってきたことで、摂食嚥下機能評価を統一し継続的な支援を行えるように「ミールラウンド評価票 試案1」を作成。さらに言語聴覚士が食事時間に効率良く介入できるように、フリーの言語聴覚士を配置し、毎日昼食時のミールラウンドを実施した。

【結果】 1月8日～4月12日の活動期間中、言語聴覚士の出動人数はのべ232名（石川県106名、福井富山29名、地域JRAT97名）となった。県の担当者や多職種とは食事供給に関わる環境に関すること、特に日本栄養士会災害支援チーム（JDA-DAT）とは食事形態などについて情報共有を毎日行い、当初提供されている食事は弁当や炊き出しを中心として、レトルトの嚥下調整食品を備えておく程度であったが、活動終了時にはゼリー食、コード2、コード3、コード4、常食が提供できるようになった。個別評価から

ミールラウンドと支援内容を拡大していく中で、依頼内容としては「ムセに関すること」、「トロミに関すること」、「口腔内や義歯に関すること」、「食事形態に関すること」が多かった。

【結論】 今回、避難所での支援をするにあたり、言語聴覚士としての強みである「摂食嚥下機能」の面から食支援を行った。避難所では災害関連死を防ぐため、窒息事故や誤嚥性肺炎の防止をはじめとした「安全な食事」の環境を整える必要があった。限られた環境の中で食形態と摂食能力のマッチング、食事時の姿勢や介助の注意点などのアドバイスを行っていくことは避難者の健康を維持するためにとっても重要であると同時に、今後いつどこで災害が起こっても、支援者が日々変わる中で継続した切れ目ない支援を行うためのマニュアル化も必要であることが課題として上がった。